2020 年 8 月　Vol. 65

HERD SUPPORT Information for ASHORO

あしょろ・ハードサポート通信

今年は晴れの日が少なく、やや蒸し暑い夏となりました。季節は徐々に秋へ移っていきますが、涼しくなっても乳牛は夏場の暑熱ストレスの影響を引きずって免疫力の低下が続くこともあります。今回は大腸菌性の乳房炎についての話題です。

◆ 大腸菌性乳房炎の特徴

糞尿で汚れた乳房は要注意

大腸菌群は環境性の乳房炎原因菌であり、糞やオガクズ、汚水に多く含まれています。そのため大腸菌性乳房炎の発生は環境衛生や搾乳衛生と密接に関係しています。大腸菌群は増殖スピードが速く、乳牛の免疫力が低下しているときは甚急性乳房炎になることがあり、泌乳停止や起立不能を引き起こす場合もあります。また大腸菌群は死滅する際にエンドトキシンという毒素を出し、特に抗生物質治療を行うことで大量の毒素が乳房内へ排出されます。その毒素により乳腺組織が破壊されて乳房が壊死したり、乳牛がショック症状を引き起こして死に至ることがあります。

◆ 大腸菌性乳房炎が発生したときは

乾乳牛舎も衛生的に

水様性乳汁、乳房の硬結、食欲低下などの症状を示し、重篤な大腸菌性乳房炎が発生した場合は、むやみに抗生物質治療は行わずにすぐ獣医さんを呼び、乳房内洗浄を行って毒素を希釈して搾り出すなどの処置を行ってもらいましょう。早期発見と早期処置により、治癒率を上げることができます。分娩直後に大腸菌性乳房炎が多い場合は、乾乳期間に感染して分娩後に発症していると考えられますので、乾乳牛舎における牛床衛生の徹底や乾乳時に乳頭シール材の使用を検討することも一つの手段です。

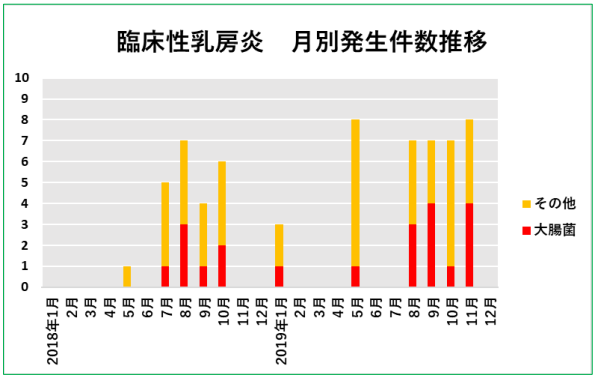
◆ 予防は環境衛生が第一

近年ではワクチン接種によって大腸菌性乳房炎の症状緩和に一定の効果が出ている農場もありますが、「特効薬」ではないため、きちんとした乳房炎対策を行った上での接種が基本になります。大腸菌性乳房炎を予防するためにはまず環境、特に牛床の衛生に気を配ることが大切です。除糞や敷料交換の頻度を上げ、消石灰を適量散布することが効果的になります。また気温と湿度が高いときはゼオライト系資材を散布するなど、牛床を乾燥させることも大事なポイントです。

◆ バルク乳スクリーニング検査での大腸菌群は？

バルク乳スクリーニング検査で大腸菌群が検出されることがありますが、この場合は大腸菌性乳房炎が原因というわけではなく、乳房や乳頭表面に存在していた大腸菌群が不十分な拭き取り作業によってバルク乳に混入したことが疑われます。バルク乳スクリーニング検査で大腸菌群が検出されたときは、牛床衛生や乳頭の拭き取り作業を今一度見直し、フィルターソックスの汚れ具合も確認しましょう。

◆ 乳牛にストレスを与えないことも大切



一般的に大腸菌性乳房炎は夏場に多いイメージがあります。しかし右の図では６０頭規模の農場における２年間の臨床性乳房炎の発生件数の推移を示しており、夏場以外でも発生件数は多いことがわかります。比較的過ごしやすい季節でも、サイレージの変敗、搾乳作業者の変更、過密な飼養環境などによって乳牛にストレスがかかり、免疫力が低下しているときに大腸菌性乳房炎が発生することがありますので注意が必要です。環境衛生や搾乳衛生の徹底、また適切な飼養管理など乳牛にストレスを与えないことが免疫力維持につながり、大腸菌性乳房炎のダメージを極力少なくする最善策となります。　（市川雷太）